

白選五十五首



島田修二

しまだ・しゅうじ 1928年、神奈川県横須賀市生まれ。44年、兄が戦死。45年、江田島の海軍兵学校で原爆投下を目撃。これらの体験が作歌の大きなモチーフとなる。宮柁二に師事し、「多磨」「コスモス」を経て、「草木」の選者。朝日歌壇選者。歌集『渚の日日』で遼空賞、『草木園土』で詩歌文学館賞受賞。

夕風の過ぎて沖つ方に灯動けりすぎゆきはなべて優柔にして

公園よりみゆる海も空も暗ければ輪郭なして客船点る

ドオミエの夜行車の囀を思ひしより混みし乗客俄かに親し

ただ一度生れ来しなり「さくらさくら」歌ふベラフォンテも我も悲しき

怵へつつ声あげぬ子は係累を隔てて病めりギプスの中に

或る星をみつむる思ひ足病みて童仲間こどもなかにに紛らひゆかぬ子

足を病む汝が三輪車の影曳きてかく美しき落日に遭ふ

夜の庭に腕光らせる三輪車空より降り来て置かれし位置に

はるかなる新緑の中に妄想の鬼一匹を見失ひたり

秋の日の翳りのつつむ一本の老杉のごともすくと立てぬか

「大淀」も「利根」も沈める内海が記憶のなかに燦きやまず

朝の階段

花火の星

青夏

長く歌を作ってきたので、五十首を選ぶとなると、幾通りもの工夫ができそうにも思うが、やはり他人が引用した作品などは落としていく感じで、結果的には平凡なことになった。

既刊九冊の中で、もっとも多く選んだのが『渚の日日』であるが、この歌集の出版にかかわって、少々の思い出がある。亡き上田三四二氏よじに関することである。

出版社の求めに応じて、十首ほど歌集の帯に刷る歌を選び出して欲しい、というので、紺地に白く抜いた十首が裏側にあったのだが、上田氏が「島田君、これ白選の十首なの」と聞かれたのである。「そうですよ」と答えたのだが、上田氏は「そうかなあ。ぼくの選と

アジア史に人間の罪誌しつたわれが裡なる兵士老いたり
肩を落し去りゆく選手を見守りぬわが精神の遠景として
嘆きつつ一生は過ぎん積りたる雪の上ふたたび泡雪の降る

街角にも言ふ鸚鵡と睜め合ふ寂しく充ちてわが私生活

かの戦後よみがへりぬと思ふまで雪ふかき街につづく歩行者
ガス室をアウシュヴィッツに作りしも人間なればあきらめ眠る
押し寄する大波緑く立ち上り晩夏は寂し海も人らも

かなしみに包まれしごとく新しき黒詰襟に少年笑ふ

食むべかる葡萄を前にたまゆらのいのち惜しみて長し戦後は
幾百のまなこ累なる夜の街に砦のごとき場所捜しゆく

近づきてまた遠ざかるたましひのむらがるごとく雲はてしなし

仏蘭西ふらんす区古き街路にかなしみのまぎるるごときゆふまぐれあり

山また谷ながく続けるこの国と戦ひしなり敗れたるなり

雨を浴び結実のときを揺れて立つ向日葵または裸形の男

すぎとほる記憶の地平かの夏を黒く灼きたる茸雲立つ

踉跄と杜甫の家族も従きゆきしこのなまぐさきにんげんの列

家といふかなしみの舟成ししよりひとは確かに死へと漕ぎゆく

またの名をグレゴール・ザムザ五十歳変らぬ面を曝しゆかにか

夢ひとつ現ひとつと歌ひ来て花水木散る庭に酔ひるつ

何をしてるのだといふこゑのする 歌を作つてゐると答ふる

〔冬首〕

はずいぶん違うなあ」と言う。何か座談会かの席だつたと思う。岡井隆、岡野弘彦といった面々もいて、上田氏ほどではないが、それぞれが同じような意見を述べられた。

あとがきの日付が五十五歳の誕生日であつたこともあり、何となく祝福されて出たような気がして、その一冊には批評に引用された作品なども一首ずつチェックしたりして、自身の歌集の中では出来上がった後も丁寧に読み返したりした。

考えてみると、それまでの歌集は、出来上がってしまったと、読み返すのも嫌で、見向きもしなかった。「渚の日日」に至って、漸く己と向き合うような気持になつたのだと思う。そのようなことがあつたせいにか、「渚の日日」は第十八回逍空賞という、身に余る栄誉を受けた。自選、他選というような視点をはなれて、私にとつて思い出ぶかい一冊である。

ついでのことを言えば、「行路」という第九歌集の後に、二冊分ぐらゐの作品が溜まっているが、まだ整理の手がつかっていない。この一月二十六日、乗用車にはねられて、もう少しで死ぬところだったが、幸いにして一命をとりとめた。横断歩道ではない、信号無視の、文字通り行路を踏み外してなお許されたからには、その折の歌なども出しておかねばなるまい、と思つている。

〔渚の日日〕

35 ——— 自選五十首

サラリーの語源を塩と知りしより幾程かすがしく過ぎし日日はや

北へ行く列車の裡にきこえる母音のおもき日本のこゑ

限りなく死は続くべしひとつづつ頭蓋を支へ階くだる人ら

嘆きゆくところをはつか照らしたり昭和末期の舗道のひかり

特徴を問はれ俄かに頭を下げて髪の中なる傷見する孤児

睡蓮の花ひらきたりしまらくのひとりごころの器なしつつ

あたらしき生姜を搦ればこの夏の地霊かそけくわれに添ひくる

粗布におほへる棒のごときもの累々として世界は病めり

文芸をたつきとなせばあはれあはれ悪霊のこゑ聞くことあり

あらはなる生おもむろにしづめつつ草木國土冬に入りゆく

みじかかる一生にあらざりありて幾百の富士われを励ます

「東國黄昏」

「春秋帖」

「草木國土」

歳晩に得たるいちにち現世の余白あるいは一期のごとし

まがまがと田畑の荒るる道に来て歌のみだれのごとくかなしむ

神神のやどれる夜を直立てる無花果は昏き葉を垂らしたり

仮初の生を重ねて行く路に緩きくだりの眺めたのしむ

かなかなを聴きしは昨か耳鳴のあはひ幽けく木枯とらふ

よるこびとかすかに違ふ安らぎに丘辺の道の果なきごとし

海見ゆる家にあり経し日日とほく後生を照らす月仰ぐかも

なさざりし慙愧慙愧の風音を胸にしまひて河豚刺しを食ふ

「行路」